

## 開発コンサルタント“見習い”として働いて ～事務職制度で未来につなげる～

### 新卒者にもキャリアパスを提供

2016年4月にIDCJに入職しました家高真衣と申します。

「国際協力を仕事にしたい」。世の中には、そうした希望を持つ人たちが少なくないのではないのでしょうか。私も高校時代に開発途上国についての講演を聞いて以来、まさにそんなことをぼんやりと思い描く学生でした。そして大学に在学中、カンボジアを訪れたことがきっかけで、国際協力業界で働く決意を固めました。いざ就職活動を始めてみると、この業界は新卒採用が少なく、就職情報を集めるだけでも苦労しました。

そんな中で出会ったのが、IDCJの「開発コンサルタントファーストキャリア制度」でした。この制度は、学部卒業生を対象に3年間の期限付きで事務職員として働き、政府開発援助（ODA）案件の受託業務に関する事務全般を担当するというものです。3年間の業務が完了した後、海外の大学院などに進学する際には、IDCJでの勤務評価の結果に基づいて留学費用の一部について支援を受けられる仕組みも用意されています。

開発コンサルタントを目指す新卒者にとって、そこに至るまでのキャリアパスはなかなか確立されていないのが実態です。そうした中で、一つのキャリアパスを提供したいという思いから始まったのが、IDCJのこの制度です。特に、「国際協力を仕事にしたい」という思いを持ちながらも、学部を卒業した後大学院に進学することが困難であったり、先に国際協力業界をのぞいてから、その後のキャリアをじっくり考えたいという人にはピッタリなのではないでしょうか。

### プロジェクトを裏からサポート

IDCJで働き始めて、はや半年が過ぎましたが、社会人1年目でもある私は、まだまだ毎日、新しく学ぶことの連続です。日々の業務としては、プロポーザルの作成支援から始まり、契約手続き、精算業務などを行っています。その他にも、大学の海外研修プログラムの業務支援や、社員の外部研修のサポート業務なども担当しています。私のように入職したばかりの新人でも、基本的には一つのプロジェクトを一人で任せてもらえ、希望すれば自分が興味を持つプロ

ジェクトも担当させてもらうことができ、非常に自由な風土で仕事をしています。不安もありますが、日々、責任感をもって業務に励んでいます。

もちろん、こうした事務の仕事は一見地味だと思われがちですし、現場に行っただけでなければ、プロジェクトの成果を肌



家高 真衣さん

で感じることも難しいのが正直なところです。それでも、実際に仕事してみると、プロジェクトの流れや仕組みを知ることができ、この業務がいかに重要であるかひしひしと感じています。また、ODA案件の中にもさまざまな分野があり、支援業務の中でこうしたプロジェクトの様子を垣間見ることができるのも楽しみの一つです。プロジェクトを裏で支えるこうした業務を経験することは、開発コンサルタントを目指す上で非常に意味のあることだと感じています。

### 「国際協力」を体験して学ぶ

国際協力業界に身を置いて見る景色は、それまで業界の外側から見ただけのものとはまったく違います。まさに「百聞は一見に如かず」と言われる通り、自分自身で実際に体験してみないと物事の本質は見えないものだと思います。その意味でも、今後の自分のキャリアを考える上で、大学を卒業してすぐにこの業界に足を踏み入れることができるとても良かったと考えています。私には学ぶべきことがまだまだ山ほどありますが、日々の業務はもちろん、IDCJには、国際協力業界をはじめ、自分の興味のある分野について学びを深める機会がたくさん転がっています。その一つ一つを大切にしながら、残りの2年間も業務を務めていきたいと思っています。開発コンサルタントを目指す方々のキャリアの在り方の一つとして、この制度を皆さんに少しでも知っていただければ幸いです。

(文責：国際開発センター 業務支援室 家高 真衣)